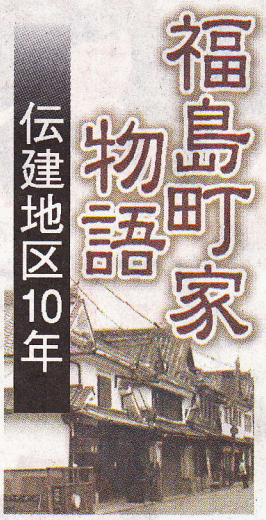
西日本新聞　2012年(平成24年)5月28日　月曜日

福島町家物語

伝建地区10年



■□3□■

教室飛びだし町並みへ

学び

「2千円より高くしてはどうか」「そうすると出店者が減るのでは」

21日夜、和菓子や仏壇の老舗店主ら約20人が八女市福島地区の町家カフェに集まって開かれた、町歩きイベント「白壁ギャラリー」の出店者会議。今年から出店者に求める参加費をめぐり、議論は熱を帯びた。その意見をまとめて出席者に披露するため、有明高専(大牟田市)の建築学科准教授の加藤浩司さん(38)は、一つ一つ模造紙に書き込んだ。

会議には、教え子の専攻科2年河田昴希(こうき)さん(21)も参加していた。司会進行からタイムキーパーまで、師弟コンビは表に裏に動き回った。

「議事録と今後のスケジュールのまとめについては、次までに河田君にやってもらおうかね」

会議終了後、加藤さんから突然〝宿題〟を言い渡された河田さんは思わず苦笑い。それでも「こんな体験は普通の学生にはできない。友だちからもうらやましがられていますよ、半分は」と冗談交じりに充実した表情を見せた。

加藤さんの研究室は通称「カト研」。福島地区を舞台に、町並み保存運動や昔のくらしの聞き取り調査を続ける。

2003年4月、千葉大学大学院博士課程を修了し、有明高専に着任した加藤さんは、すぐに20キロ以上離れた福島地区に通い詰めるようなった。1年前に国の重要伝統的建造物群保存地区(伝建地区)に選ばれ、朽ち果てた町家が次々に修復される現場と、熱心に町づくりに取り組む住民の姿に心引かれた。「ここなら元気な地域の人たちと関わることができると思いました」と振り返る。

06年、通うだけでは飽き足りず、油製造の作業場として使われていた明治初期の建築の町家に引っ越した。実際に住んでみると、ふとした会話をきっかけにご近所との距離が縮まるなど、研究では得られない成果があった。

住民との距離をさらに近づけたのが、09年12月の妻久美さん(28)との結婚。独身時代には存在さえ知らなかった「観音講(かんのんこう)」が自宅に回ってくるようになった。商売繁盛や安全を願って昭和30～40年代に福島地区で始まった風習で、高さ約20センチの仏像を預かり、毎朝お供えのご飯を換えて手を合わせ、1カ月後に隣の家に回すというもの。近所のドブ掃除などにも誘われるようになった。

「やはり所帯を持つまでは遠慮されていたということでしょうか。古い町に入るのは難しいと感じていましたが、ようやく一線を越えられたと思いました」

今は研究としてだけでなく町家の住民としても「どっぷり福島に漬かっています」と語る。「研究室ではこれだけ生きた教材との出合いはありません。今後も学生とともに『地域に学ぶ』ことを実践していきます」

福島地区と出合って10年目、研究テーマは尽きない。

白壁ギャラリーの出店者会議で打ち合わせする加藤浩司さん（左）と河田昴希さん

有明高専建築学科・加藤研究室

5年生4人と専攻科生2人が加藤浩司准教授の指導を受ける。昨年の町歩きイベント「白壁ギャラリー」では、来客200人に来訪歴や案内図についての意見など14項目のアンケートを実施した。